

スクールカウンセラーだよ 2020年10月号

茨城県スクールカウンセラー 落合幸子

「いい子でいることを要求しすぎていないか」

私が子どもの反抗に最初に驚いたのは、上の子が小学校3年生の時でした。

学校から帰った子に私が何か言った途端、「うるせえババア」という言葉が返って来ました。私はまさか自分の事とは思わず、「ババアが家のどこかにいるのか」と思って、思わず後ろを振り向いたほどです。

3歳ぐらいの時、「ダメ」「嫌」などと盛んに言っていた時期があったはずですが、でも、それは第一反抗期だと受け止めていたので、ショックとは思わなかったのです。小学校低学年ぐらいの時は、何かの折に私が「出て行きなさい!」と叱ると、「ママ～」としがみついてきました。その子が、中学年になった時、同じように言うと、さっと出て行ってしまっ、夕方まで帰って来ないことがありました。しがみついて来ると予想していたのに、「えっ、行っちゃうんだ」と感じた時の驚きを今でも鮮明に覚えています。夕方帰ってきたので聞くと、小学校の校庭で遊んでいたという話でした。

このように反抗というのは、子どもの成長に伴ってどの時期にも起きるのです。自分には反抗期がなかった。だから子どもの反抗はすごくショックだというお母さんの話を聞くことがあります。しかし反抗というのは、自分の意思が出てきた印で喜ばしいことです。

今回は、反抗期というのはどういう時期か、ということを書いてみたいと思います。

私には、二人の男の子がいます。反抗期と受験が重なると大変だとは噂に聞いていたのですが、我が家がまさしくそれでした。中学三年生になっても背が伸びずに悩んでいた、その息子の背が急に伸び始めた夏休み。受験勉強をしようとする子に、私は「せめて塾ぐらいは行け」と盛んに言っていました。ある日、私が長男のことを愚痴ったのです。その途端、次男が「そんなことは聞きたくない。僕はいい子でなんかいたくないんだ!」と殴りかかってきました。

「いい子でなんかいたくない」という言葉に、私は衝撃を受けました。私は大学で心理学を教えていました。母親相手の講演などで、いい子の危険性を話していたのです。それなのに、子どもに言われて初めて、自分の子が人の顔色を見て動く『いい子』でいたんだ、ということに気づいたのです。

「いい子の息切れ」という言葉があります。いい子の問題は、不登校、家庭内暴力などの大きな問題が起きるまで、いい子であったがために誰も気づかないのだと思い知りました。

そんなことがあった数日後、子どもの部屋にノートの切れ端が落ちていました。そこに次の文章が書いてありました。『自分』と題する作文で、中学三年生の夏休みに書いたものです。

『自分』

僕は、小学校の卒業文集に、「この六年間に本当の自分を見つけられたか」という作文を書いた

が、その時は、まだそんなものを見つけることは出来なかった。しかし、この時期になって、本当の自分というものを垣間見ることが出来た。それは自分でも思っても見なかった程、素晴らしいものではなく、汚く、醜いものだった。

夏休みに四、五回しか家を出なかった僕は色々なことを考えた。自己嫌悪とってよいのだろうか。とにかく自分が嫌になった。次男の僕は、兄が成功したり失敗したりしているのを見て、小さいころから自分をしばりつけていた様な気がする。だからいつのまにか自分が見えなくなって、自分はなぜ自分の目で本当の自分、鏡に映っているのではない本当の自分をみれないのかと想ったりした。またその頃は、そんなことを考えている自分がマセているなどと思って、そこで満足していた。

しかし、この夏は、自分に多くの時間をくれた。毎日のように親が「勉強しろ」と言っていた。でも、その声はノイズみたいに聞こえて、僕の耳に入ってこなかった。こんな自分は初めてだった。そんな日が一週間もすると、僕は何も考えられなくなっていた。自分の中で心の動きがはやすぎて見えなかった。

「他人によく見られたい」

「本当の自分の姿で生きていきたい」

といった、今まで自分をしばりつけていたものと、自分の意志との対話が、自分の中でどんどん進んでいった。でも、今から考えると、この対話は決着がつかなかった方がよかったのかもしれない。なぜなら、結局ついてしまったその決着の結果こそが、自分に本当の自分を見せる原因となってしまったからだ。

ある日、僕は親と喧嘩をした。理由は親が自分の子が色々悩んでいるのに、そんなことを知らずに、「勉強しろ、勉強しろ」と、言っていることに僕が反抗したからだ。まあ、そこまではよくあることだった。しかし、毎日の、自分とそれをしばり続けてきたものとの対話によって、僕は自分の周りにあった余裕が全て剥ぎとられていた。そこには今まで自分を抑えつけ、また作り上げてきた物が何一つなかった。

本当の自分がいたのだ。

次の瞬間、僕の口から出たものは、今まで抑えつけられていた僕のすべてだった。醜い言葉を吐き、親に暴力をふるい、何を言われようと、人を傷つけ続ける僕のすべてだった。今の僕の本当の中身だった。僕がずっと探し続けていたものだった。

小学校の卒業文集のラストには、「自分が本当の自分をしっかり見つけているかどうか、何年後にこれを読むとき考えなおしてみたいと思う」と書いてある。きっといつまでも消えない、この自分こそ、そのすべての答えだと思う。今までの自分は、どんどんふくらんでいく、本当の自分をしばりつけるものばかりを、道徳、勉強などで成長させてきたように思う。でも今、この夏休みの終わりから、ようやく僕はこの醜い自分を成長させていけるのだ。

「自分を磨く」。

この言葉が、今から始まる本当の僕の人生の名前だと思う。

この文章は、大好きだった国語の先生に見せようと思いたらしいのです。本人は書いてすっかりしたのか、書いたことさえ忘れています。今では、私にとっては宝物になりました。

さて、自分の子が「他人によく思われたい」という意識の強すぎる『いい子』でいいか。親である自分が世間体ばかり意識していないか。ちょっと自分の子育てを振り返ってみてください。